

# Elizabeth Gaskell の ‘Crowley Castle’ に 隠されたテーマ

——没落する地主の残虐さ——

中 村 祥 子

はじめに

## I. 没落する旧家のテーマ

- 1) Theresa の執着した Crowley 家の由来
- 2) Crowley 家の消滅の原因
- 3) Theresa の残虐性

## II. 殺人事件について

- 1) 近代社会の犯罪
- 2) Bessy 毒殺の経緯

## III. 「有罪それとも無罪」

- 1) Theresa の願望の有罪性
- 2) 代理殺人

は じ め に

Elizabeth Gaskell は1863年に ‘Crowley Castle’ (「クロウリー城」) という短編小説を書いている。これは Sussex にあった旧家 Crowley 家の直系の子孫が、財産の相続権は自分にあると思い込み、その邪魔になると見做された者が毒殺される事件の描かれた作品である。

Charles Dickens が編集する週刊雑誌 *All the Year Round* (『一年中』) は、その年のクリスマス特別号を *Mrs. Lirriper's Lodgings*<sup>1</sup> (『リアリパァ夫人の下宿屋』) という表題で発表した。そのオムニバス形式の物語集の二つ目の

作品<sup>2</sup>が ‘How the First Floor went to Crowley Castle’ (「お二階の住人がクロウリー城へ行った顛末」) (以下 ‘How the First Floor’ と略記) であった。しかしこの物語集の寄稿者はすべて無署名であったため、当時 ‘How the First Floor’ が Gaskell 作とは特定されなかった。また ‘How the First Floor’ は Gaskell の他の短編小説のように後に単行本に再録されるということもなかったために、その後も長い間埋れたままであった。しかし1906年に Gaskell 全集 (Knutsford 版) が編まれる時、編者の A. W. Ward は Gaskell の残されていた手稿の一つが、‘How the First Floor’ の前半 2/3 以上に相当するということを発見した。<sup>3</sup>それによって Ward は ‘How the First Floor’ を Gaskell の作と確定し、改めて ‘Crowley Castle’ の表題をつけて、全集に初めて Gaskell 作品として収録したのである。その際 Ward はマニュスクリプトを優先させ、連鎖式の物語集に使われたために変更されていた ‘How the First Floor’ の冒頭部分をはじめ、雑誌掲載時に圧縮された跡のある部分も、マニュスクリプトの残されている限り元に戻した。<sup>4</sup>

しかし再発見されたあとも、この作品はどちらかと言えば等閑視されている。‘Crowley Castle’ の書かれた1863年は、長編小説 *Sylvia's Lovers* (『シルヴィアの恋人たち』) が出版され、中編小説も代表的な ‘Cousin Phillis’ (『いとこフィリス』) や ‘A Dark Night's Work’ (『暗い夜の行為』) が発表され、その他幾つか小品も発表されており、Gaskell にとってかなり多作の年であった。そうした中であって、この ‘Crowley Castle’ は批評家達にほとんど注目されずに来たのである。

言及される場合も概ね低い評価しか与えられない。Ward 自身、「これ程ユーモアの要素が完全に欠如しているものは、後期の作の中には他に見当らない。…… [二人の登場人物] Theresa と Bessy の対照性は、誰も Gaskell 夫人程自然らしく真に迫っては描けないような個性のぶつかり合いの一つではあるが、この作では彼女の創作条件のせいで細部の綿密な仕上げができていない」(xlii) と言っている。G. D. Sanders になると、‘Crowley Castle’ は「*Cousin Phillis* のような天才的なところをたっぷり含んだ物語を書いた作

者と同じ手で書かれた」<sup>5</sup>とは思えない程の「平凡で凡庸な作品」であると言  
い、「作者は *Crowley Castle* の話を、少なくともその一部を、人から聞いてい  
て、それを聞いた通りに書いたに過ぎない」と判定し、この作品の創造的な  
側面を厳しく否定している。

また J. G. Sharps も、この作品のモデルになったかもしれない場所——そ  
れらを Sharps は色々推測している——を作者が訪れた際に、そこで土地の  
人々から聞いた話を元にしたのかもしれないと推定し、「Gaskell 作品の平均  
以下の出来ではない」(452) にせよ、「この作品では作者の創造の才能はほん  
の僅かなもの」(451) しか認められないと言っている。Edgar Wright も、  
「Gaskell 夫人が *All the Year Round* に寄稿した最後の作品となった  
'Crowley Castle' は……彼女の書いた最悪のものの一つ」<sup>6</sup>で、「金もうけのた  
めの粗末な作品」(16) だと決めつけている。

例外的にフェミニズム批評の立場から Felicia Bonaparte が、その著 *The  
Gypsy-Bachelor of Manchester*<sup>7</sup> (『マンチェスターの流浪の独り者』) で  
'Crowley Castle' を取り上げ、これは Gaskell の抑圧された本音が顕れた作  
品であるとして好意的にやや詳しく論じている。そしてそこでは二人の女性  
Theresa と Bessy の対照的な描き方が——Ward には前述のように、Gaskell  
にしては不十分だと批判されている部分だが——逆に高く評価されている。  
しかし Bonaparte の論は、後でも触れるが、この二人の女性登場人物の対照  
性を恣意的に解釈したものであり、その全体の作品解釈も決して正確とは言  
えないものである。

ところで 'Crowley Castle' は気味の悪い恐怖小説の類に分類されることが  
が多い。それはほとんどの批評が、作中で起こる悲惨な殺人事件にのみ注目  
してなされるからである。そして殺人事件が描かれていることをもって、短  
絡的にこれは「センセーショナルな小説のための通俗的な様式のものに属す  
る」<sup>8</sup>とされるのである。そして1860年代のいわゆる煽情小説の流行に便上し  
たものという解釈が一般的である。

しかし果たして 'Crowley Castle' は煽情小説の影響下に書かれた作品な

のだろうか。または怪奇小説や恐怖小説の類に分類できるものなのだろうか。そもそも「平均以下の出来ではない」とする Sharps でさえ、「メロドラマ的で恐ろしい要素……家庭問題を扱った部分そしてその他、登場人物の幾人かの美事な描写」(452-454) といったところにしか「この作品のうまさ」を見ていないが、その位の評価で片付けられてよい作品であろうか。また Bonaparte の解釈のように、二人の女性登場人物の行動や心理の一部にのみ、読み取るべき意味のある作品であろうか。

筆者には、‘Crowley Castle’ は、作者が常に関心をもって描いてきた、没落する地主のテーマが扱われ、そのテーマが鮮明に提示された、従って作者の主張がはっきりしている佳作であると思われる。以下において ‘Crowley Castle’ とはどのような作品なのかを具体的に見ていきたい。

## I. 没落する旧家のテーマ

‘Crowley Castle’ には二つの特徴が認められる。一つはこれが古い家系の一族の、没落をめぐる物語であるという側面である。そしてもう一つはその過程で、陰湿な殺人事件が起こるという点である。この章ではまず前者の側面から見てみよう。

### 1) Theresa の執着した Crowley 家の由来

この物語の語り手は、先ず最初に、Crowley 家が今では消滅した一族であって、自分がこれから語るのは過去の物語であるということを明らかにする。

Crowley 家は古い騎士の一族で、その居城の跡地は Sussex の小さな海水浴場の近くにある。そこからは遙かにフランスの海岸を望むことができる。過去には栄華を誇ったこの一族も、Crowley の名を持つ最後の准男爵が今から約百年前に亡くなり、居城は荒廃し、今ではもはや村の名前に一族の名を留めるにすぎない。しかしその廃墟になった居城に隣接した教会には、かつて栄えた Crowley 一族の先祖の者たちが眠っているのである。作者と思しき語り手が、その教会を訪れる場面は次のように描かれている。

……そこに騎士の Crowley 一族の者たちが埋葬されていた。或る者は壁や床にはめられた往古の真鍮記念碑によって誉れを後世に伝えられ、また或る者は祭壇型の墓によって、或る者はこの世でのあらゆる徳を彼らに授与している見事なラテン語の墓碑銘によって記念されていた。<sup>9</sup>

こうした描写及びこの Crowley 城が「ノルマン風の大邸宅」(255)であったという記述から考えると、Crowley 一族の先祖も、*Tess of the D'Urbervilles* のヒロイン Tess の先祖の騎士 d'Urberville 家と同じく、ノルマン征服の時代にまで遡れるような、古くて由緒のある一族だったのであろう。実際、上に引用した Crowley 家の納骨堂の描写は、Tess が先祖の墓所を見る場面と大変よく似ている。

[そこには] 数世紀にわたる一族の墓があった。それらの墓は天蓋におおわれ、祭壇の形をし、質素なものであった。その彫刻は磨滅して損われ、墓碑銘を刻んだ真鍮板は、そのはめこみの穴からはぎとられ、それを留めてあった鉄の跡は、砂岩の崖にある貂の穴みたいになって残っていた。<sup>10</sup>

黒ずんだ石には、ラテン語の碑文も刻まれている。

また Tess の中で、Angel Clare は次のようにも言っている。「つまり、彼女 [Tess] の父親は、最も古いノルマン家の男系の後裔なんで、この国の農村には、こういった類のものがほかにもたくさんいて、賤しい百姓暮らしをしているのだ」(ch. 53), と。

恐らく Tess の舞台になっている Wessex や、'Crowley Castle' の舞台の Sussex には、実際にこのようなノルマン征服の頃にまで遡る騎士の家柄だが今では没落した一族の者たちが、幾らもいたのだろう。従って（先にも触れたように、Sharps は 'Crowley Castle' について作者がどこかで聞いた話を Sussex の村に場面を移して書いたにすぎず、プロットの概略は作者の工夫ではないだろうと述べているが）、作者が「1862年に Sussex で安静療法に従事

していた間に」<sup>11</sup>どこかで聞いたかもしれないという可能性は大いにある。勿論、そのモデルの場所を特定できないということは、Gaskell がこの地方に遍在した没落騎士一族の話から、彼女独自の物語を創造した点はやはり否めないのであるが。

Crowley 家は18世紀末に消滅する。作者はこの作品で、何故 Crowley 家が消滅し、その居城も今では広大な遺跡に変じてしまったのかを語っていくのである。

## 2) Crowley 家の消滅の原因

旧家の没落という現象は、既にこれまで Gaskell が幾度か取り上げたテーマで、それを中心テーマに据えた作品も幾つか書かれている。その意味では 'Crowley Castle' も Gaskell になじみのテーマの作品である。しかし重要なのは、この作品では没落の原因がどのように描かれているかという点である。

'Crowley Castle' までの、旧家の没落を描いた作品は、その没落の原因とされるものの内容によって、大きく二つのグループに分けることができる。一つは 'Morton Hall' (『モートン屋敷』) や 'My French Master' (『私のフランス語の先生』), 'My Lady Ludlow' (『ラドロウ伯爵夫人』), *Wives and Daughters* (『妻たちと娘たち』) (の地主 Hamley 家の場合) などのように、社会の変化、具体的には商工業の発達及び資本家たちの台頭によって、代わりに封建的な地主階級が没落していくと描かれるもので、圧倒的に多くの作品がこのグループに属する。もう一つは、基本的には彼らの没落も同じく社会の変動の波に飲み込まれていくのだが、その没落の直接の原因が、一族間の財産争いなど、自らの食欲さに毒されて、いわば自滅していく点にあるとされ、そこに焦点を当てて書かれる作品で、その代表的なものは 'The Doom of the Griffiths' (『グリフィス家の滅亡』) である。'Crowley Castle' は比較的数の少ないこの後者のグループに属する作品であると言える。

Coral Lansbury は

たいていの政治的急進主義者同様に、Gaskell も、古来からの家やその所有者

の貴族たちの没落に対して、快いものを感じている。廃墟に立っても彼女は決して Scott や Carlyle のようには考えず、もっと幸せな時代というものを予期する。彼女は気質的には Macaulay にずっと近い。彼は中世を荒廃と抑圧の時代と考え、現在に先立つあらゆる時期は、将来の繁栄を弱々しく予兆するものと見たのである。Gaskell は、荒れ果てた館は過去の時代の阿房宮を示すというしきたりを使っており、彼女の描くその時代の人々は愚かで横柄で、ただロマンスの世界の場所にのみふさわしい。(61-62)

と言っているが、この指摘が当てはまるのは後者のグループの作品のみであって、それは数が少ないのである。'Morton Hall' や 'My Lady Ludlow' のような上記の前者のグループに属する作品では、「荒れ果てた館」は所有主の「愚行の象徴たる阿房宮」を示すというより、むしろ時代の変化になすすべもなく流されていく者たちの無力や無能の象徴として使われている。

それに Gaskell が過去の人々の愚行を批判する場合も、彼女は「古来からの家やその所有者の貴族たち」に限っておらず、先ず批判すべき対象が何であるかを特定した上で、それに関わった人々すべてを問題にしている。例えば *Sylvia's Lovers* では、impressment (強制募兵) という歴史的事実が取り上げられ、それを許した社会について、「このような暴虐がなされていたことは、現在の我々には信じられない位である」(ch. I) と述べ、そういう過去の社会制度を批判する立場から物語を創造しているし、'Lois the Witch' (「魔女ロイス」) でも、超自然なものを信じた17世紀の人々の行為を、妄想からの残虐なものと位置付け、Lois をその犠牲者として描いているのである。

従って 'Crowley Castle' は、Gaskell の作品の中では、過去に栄えた旧家を取り上げられ、更にその没落の主要な原因が、彼ら自身の愚行や残虐性にあるとされている、数少ないものの一つとすることができる。ちなみに、作品全体としては前者のグループに属する 'Morton Hall' の中で、Sir John Morton については、市民革命時代に一旦失った領地を取り戻すために、彼が残酷な手段をとる事件が描かれており、歴代の Morton 家の地主たちの中で唯一人、後者のグループに属する残虐な封建領主として描かれている。

### 3) Theresa の残虐性

では 'Crowley Castle' はその 5 年前に書かれた 'The Doom of the Griffiths' とはどのような点が異なっているのか。一つは 'The Doom of the Griffiths' では財産争いそのものが親子の対立を生み出す原因と位置付けられて描かれているのに対して、'Crowley Castle' では殺人の起こる根底に Crowley 家の財産へのヒロイン Theresa の執着があるものの、そこに表面上は失恋やライバルへの復讐にも見える要素が加わっており、また殺人も Crowley 一族の手でなされるのではなくて忠実な乳母の手に依る、いわば代理殺人の形でなされるために、この殺人事件の背後には地主貴族の財産への執着という動機があることが、一見わかりにくくなっているという点である。(もう一点は後述。)

'Crowley Castle' では、物語の中心は次のように展開する。Crowley 家の一人娘 Theresa (しかし一家の財産は限嗣相続のため、いとこの Duke の元へ行く) と貧しい牧師の娘 Bessy とは幼なじみである。幾つかの曲折のあと Duke は Bessy と結婚することになるので、Crowley 城での Theresa の立場は微妙なものになる。その緊張関係は Theresa が Crowley 城の女主人になった Bessy を直接排除するのではなくて、Theresa の乳母が Bessy を毒殺するという形で破られる。

ここで先ず、Theresa と Bessy との本質的な対照性は何であろうか。Theresa は幼い頃から乳母のフランス人の Victorine に献身的に、しかし甘やかされて世話され、「ほっそりしたしなやかでしとやかな姿」(257) をした美人だが、我儘で身勝手に傲慢な娘に育っていく。一方、隣接した牧師館に住む Hawtrey 夫妻の一人娘 Bessy は、「生き生きした顔色で茶色の目をした丸顔の、姿は良いが硬い感じのするイギリス型美人」だった。容姿が対照的なように性格も、Bessy は Theresa と違って「もの柔らかでおとなしい子で、分別のある心優しい性質の少女」である。

Bessy はすてきなイギリスの乙女だった。心奥の秘めた思いに到るまで純粹



に善良だった。日々の慣れた面では全く分別があった。しかも、想像力がないというのではなく、彼女がそれまでその中で暮してきた狭い範囲の知識や経験を越えてまで何かを望もうとしないだけだった。(268)

しかしこの二人の一番大きな対照性は、Theresa が Crowley 家の一人娘であり、Bessy が(母親の Hawtrey 夫人は Crowley 家の遠縁に当るものの)貧しい牧師の娘にすぎないという点にある。少女の頃から Theresa は自分と Bessy とのこの社会的身分の格差をはっきり認識している。自分と一緒に、Bessy が授業料を払うことなく各種のレッスンを城で受けられることについても、まるで自分が Bessy に恩恵を施してやっているように考えている。レッスンの先生たちの課する宿題を覚えているのは Bessy の役目である。それを忘れたらそれは Bessy の怠慢である。

「Bessy は何のためにお城にやって来るのかしら。あの人たち [Bessy 親子] はレッスンのお金を一銭も払っていないわ。私たちが皆払っているのです。彼女にできる最低のことはレッスンで私たちに課されたことを私のために覚えていることです。……もし Bessy がそうしたくないと言うなら、彼女はレッスンに出席しなければよい。彼女は既に女中になってパンを稼ぐことができるだけのものは充分学んでいるわ。それは将来彼女が就かねばならない仕事だと思うけれど。」(258)

と Theresa は大っぴらに述べている。

同じ年頃 (Bessy が 6 カ月年上) のせいで幼い頃から遊び友達ではあっても、はっきり属する社会階級が異っており、このように見下していた Bessy が Crowley 城の跡取りの Duke と結婚したために、Bessy は Victorine に毒殺されるのである。この殺人事件の背後には、Theresa の良からぬ意図が濃厚に透けて見えている。従って Victorine はあらゆる時点で(母の亡くなった Theresa の、幼少時からずっと) Theresa の願望を実現してきてやった者として、ここでも Theresa の望みをかなえてやるために敢えて殺人を犯し

た、Theresa の願望実現のための代行者にすぎない。

しかし多くの批評はこれらの点を見ずに、この殺人事件を、邪悪な Victorine の独断による陰惨な犯行と見做す。たとえば Lansbury は「Victorine は極悪非道な Amante である」(61) と言っている (Amante とは Gaskell の 'The Grey Woman' (『灰色の女』) に登場する忠実なフランス人のコンパニオンで、ヒロインの身代わりに殺される女性の名である)。そして Victorine の行為を、女主人のためを思って「親切にも殺人を犯してやり、その後沈黙の代償として女主人の愛情を求めるのだ」とし、その悪魔的な献身性をメロドラマだとしている。

こうした評価は、Victorine の行為が、実際には財産や権力への執着を持つ Theresa の意を汲んだ忠実な乳母の代行にすぎない点を見落とし、Victorine の浅薄な独走と見做してしまっていることを示す。その他のほとんどの 'Crowley Castle' 論も、Victorine は「大悪党だ」<sup>12</sup>と判定するものの、彼女が何のためにそういう悪事を犯したかを全く見ていない。例えば Angus Easson は Victorine には罪を認めても、「Theresa は願望に於てさえほとんど有罪とは言えないし、ましてや殺して欲しいという望みを表明したかどうかの点では有罪ではない」<sup>13</sup>と、Theresa の潔白を前提にしている。確かに犯行そのものに直接手を汚していないという意味では Theresa は無罪だが、それを指摘するだけではこの小説に於ける Theresa の実際果した役割を見ていないことになる (尚、この点については後で改めて考えてみる)。

先に触れた Bonaparte の論は、Victorine が Theresa の代理人である側面は見ているが、Theresa と Bessy との対照性を、男勝りの積極性を持った Theresa と典型的におとなしいタイプの女性の Bessy とのそれという、性格の違いにしか見ていず、Theresa の本質が Crowley 家の一人娘であるというところにあり、一方の Bessy は Theresa によって自分の財産の横領者、権利の篡奪者と見做されたのだという点を全く見ていない。従って Theresa が Bessy を殺したいと望むのは、Bonaparte の言うような、ヴィクトリア朝の女性の優等生としての「Gaskell 夫人」という表向きの姿勢に対して、普段抑

圧されている男性的な「悪魔」としての作者の本音が表われたというようなものではなくて、本来 Theresa の場所たる Crowley 城の女主人の位置に、女中と同等と見做していた貧しい牧師の娘 Bessy が座ったからにすぎない。

作者は Theresa の残酷さを、Duke が Bessy と結婚した行きさつを通してもはっきり示している。後でも詳しく見るように、Theresa はもともととは Duke の許嫁であった。が Theresa の方が別の男（フランスの伯爵）と結婚したため、結果的に捨てられた Duke が改めて Bessy にひかれ、彼女と結婚したのである。Theresa が Crowley 城の女主人になれなかったのは限嗣相続という‘不運’があったにせよ、いわば Theresa の自業自得なのであった。

（しかも仮に Theresa が Crowley 城の法定相続人だったとしても、彼女の相続する Crowley 城の財産はすべて、伯爵と結婚した時点で伯爵に蕩尽されてしまう運命にあったと言ってよい。）本来なら Theresa は、Duke とは結婚しないで伯爵と結婚した時、それは自分が Crowley 城を放棄することであると考え、その時点で Theresa は Crowley 城の女主人の位置を諦めるべきであったのだが、そうは考えなかった、また考えられなかったところに、Theresa の根源的な誤りがある。

多くの 'Crowley Castle' 論は、この作品の中心テーマである、古い騎士の一族が、財産への執着と自らの傲岸さのせいで自滅していくという、この側面を見ていないのである。殺人事件はあくまで、この旧家の没落という枠組の中で派生する一工程にすぎない。では次章で、この殺人事件について詳しく見てみたい。

ちなみに 'The Doom of the Griffiths' と 'Crowley Castle' とのもう一つの違いは、殺人事件の描き方にある。前者では子による父親の殺害は、9代前の先祖の罪に対して被害者がかけた呪いの実現とされる。つまりその殺人事件は超自然な雰囲気の下になされる。それに対して 'Crowley Castle' の殺人事件は近代社会の犯罪として描かれている。これらの点についても次章で見ていきたい。

## II. 殺人事件について

### 1) 近代社会の犯罪

では次に 'Crowley Castle' の第二の特徴である殺人事件について見てみたい。殺人事件そのものは、Gaskell の作品では繰り返し描かれる。この作品で注目すべき点は、先ず第一に（前章で見たように）それが旧家の財産をめぐって発生したということである。つまり地主階級の、自分たちの財産への執着心は、殺人事件を引き起こす程に強力であるということを、それは示している。

もう一つの点は、これが近代社会の犯罪として描かれていることである。'Crowley Castle' は、先にも触れたように、一般に、怪し気な気味の悪い作風の作品に分類される。そしてその理由として、殺人事件が起こるからというだけでなく、例えば Victorine が Theresa の関心をひこうとして口にする、次のようなせりふが引き合いに出される。

「私の国フランスでは、もし建物に使われた最初のモルタルが人間の血でこねられていたら、その建物は風や嵐や、時の経過による荒廃から守られると考えられています。しかし私たち共有の秘密は、それは血でよくこねられたものなのに、私たちの命を団結させておくことすらできないのですものね！」(281)

しかしこれは Victorine が Theresa の「忘恩」を激しくなじって述べている比喩の部分にすぎない。この作品ではミステリーの要素はあっても、非合理主義や超自然の要素は一切含まれていないのである。

確かに 'The Doom of the Griffiths' を典型として、Gaskell はこれまで地主たちの盛衰を描くに当って、しばしば超自然な要素を持ち込んだ。'Morton Hall' でも、Morton 家の衰退は、二百年前かけられた呪いの実現とされている。また作者は、犯罪の動機そのものに対しては常に合理的解釈を示しているものの、時には超自然な要素を作品の中に入れて、物語を興味深いもの

に仕上げることもあったし（例えば 'The Old Nurse's Story'（「乳母物語」）、幽霊物語の断片も残されている。しかし超自然な現象の扱いについては、作者は或る時点（1855年か56年頃）から態度が変化しているのが認められる。例えば1859年に書かれた前述の 'Lois the Witch' では、超自然な現象を信じて無実な者を処刑した過去の人々の愚行が厳しく批判されている。こうした内容の作品を書いたあと、Gaskell はたとえ物語の中に於ても、超自然な現象については扱いが大変慎重になっている。直後に書かれた 'The Crooked Branch'（「ねじれた枝」）は、雑誌 *All the Year Round* 初出の時には、やはりクリスマス特別号の *The Haunted House*（『幽霊屋敷』）と名付けられた物語集に含まれる一編だったために、不適切にも（というのは Gaskell のこの作品には「超自然なことは何も起こらない」（Sharps 325）のに）'The Ghost in the Garden Room'（「あずまやの幽霊」）と題されていた。しかし Gaskell は翌年自分の短編集にこれを再録する時には、これを 'The Crooked Branch' という、地味だけれども内容に相応しい表題に変更したのである。甘やかされた一人息子が誠実に生きてきた両親にまで犯罪行為を働く物語なので、これが雑誌編集者に変えられる前の元々作者の意図した表題だったのかもしれないが、この題名変更は、この時期に Gaskell がたとえ読者を引きつけそうな表題であっても、幽霊の文字には我慢できなかったことを示している。

また1860年に書かれた 'Curious if True'（「もし本当だったら不思議なこと」）は妖精たちの世界が描かれたものだが、それはカルピンの傍系の子孫たる主人公がフランスの森で眠りこんだ時見た一夜の夢であると作中で明確に説明されており、表題からもそのことは明らかである。

1863年に書かれている 'Crowley Castle' も、従って超自然な雰囲気はむしろ意図的に排除されているのがわかる。特に犯罪の動機は、I 章で見たように、はっきり合理的に描かれている。また語り手はこの話を村の古くからの住人たちに聞くのだが、彼らはその話を自分たちの父親から直接聞いたのであって、話の出所は「それ [彼らの父親の世代] 以上遡ることはない」（255）。つまりこの話は伝説や言い伝えという多分に神秘的で曖昧な要素の入り込む

余地のない、つい二世代前に起った事件として語られていくのである。

## 2) Bessy 毒殺の経緯

この殺人事件は次のようにして起こる。

Crowley 家の最後の准男爵となった Sir Mark Crowley は、妻が彼らの一人娘 Theresa を残して早くに亡くなったあとも再婚しなかったので、男の跡継ぎを持たなかった。財産は限嗣相続になっていたので、Mark 卿が亡くなれば、Crowley 家の財産（居城と所領）は Mark 卿の妹の子 Marmaduke Brownlow（通称 Duke）の所へ行くことになっていた。そして Theresa は「母親の財産と Mark 卿が自由に遺せるものしか相続できないことになっていた」（256）。しかし Duke は既に両親が亡くなり、後見人の伯父 Mark 卿の所に一緒に暮しており、伯父のお気に入りだった。しかも年も Theresa より 7～8 歳程年上で、Mark 卿は将来は娘の Theresa と甥の Duke を結婚させるつもりでいたし、伯父を愛する Duke も、それを承知していた。この暗黙のうちの婚約はいわば公然の秘密で、Theresa も 15 歳の少女の頃に、Victorine の不用意な言葉からこれを知り、意識するようになる。

しかし、先に触れたように、Theresa は Duke とは結婚しないで、フランスの貧乏貴族、自称 Province の伯爵と結婚してしまう。その理由は、一つには Duke が Oxford 大学を卒業したあと 3 年の予定で grand tour に行っている間、やはりパリに出た Mark 卿父娘と合流するよう要請した伯父の手紙に対して、Duke があと 3 カ月 grand tour の期間が残っていることを理由に応じなかったので、Theresa が Duke に当てつけたためであり、またもう一つには、Theresa の財産に目をつけた伯爵に、Theresa が巧みに誘惑されたためであった。

この件でも作者は、婚約解消の責任は Theresa の側にあって Duke にはないことを明確にしている。先ず Duke は grand tour に出かける前に Theresa との婚約について Theresa 自身の口からはっきり承諾を得ておきたいと Mark 卿に申し出た。しかし Mark 卿がこれを許さなかった。Mark 卿には、娘をあと 3 年間、表向きは誰とも婚約していない状態で自分の手元に置きた

いという、親のエゴイズムがあり、また娘と Duke との婚約は余りにも自明のことであって、改めて話題にすることではないと Mark 卿には思えたからである。Mark 卿がその後娘をパリに連れて行ったのも、娘が近い将来 Duke と結婚する時、広く大陸の上流社会を見て来た Duke が「自分の好みには Theresa を余りに田舎臭いと思いはしないかと恐れ」(263), 「パリの先生や社交界によって Theresa の教育の仕上げや作法を完了するという考え」からであって、Mark 卿にとっては、娘と Duke との結婚はあくまで自分達の生活設計の大前提だったのである。Duke はそれには誠実に応えようとしたのだから、この婚約破棄に対して Duke には一切責任はないのだった。

翌年(1864年)に執筆が始まっている *Wives and Daughters* で、Roger と Cynthia との婚約及びその解消の件でも作者はよく似た場面を創っている。その場合もやはり Cynthia に責任があって Roger は完全に免責されるように描いている。そして作者はこれを Cynthia の身勝手に軽率な性格を示す出来事として挿入していることがわかる。同じように 'Crowley Castle' でも Theresa と Duke との婚約破棄は、Theresa の我儘な行為の一つを示すものとして描かれたと見做すことができるだろう。

しかし現代の読者にとっては、Theresa は、周りの者たちはそのつもりでも、何も Duke と正式に婚約しているわけではないと考えていること、いつも「彼女は夫の選択は自分自身です」(260)と考えていて、「それは Duke になるかもしれないし、誰か別の人になるかもしれない」と考えていること自体は(作者は Theresa の驕りを示そうとしているのだが)、必ずしも批判されるべきことではないと思える。

ただ問題は、先に見たように Theresa と伯爵との結婚が、Theresa のそういう主体的選択を示す出来事ではなかったということである。また逆に、もしそれが Theresa の自主性を尊重する手段としてのものだとしたら、Theresa は自ら選んだ結婚に対して、その結果もすべて自らに引き受けなければならない。つまりこの伯爵との結婚は、当然、Crowley 城放棄をも意味することを自覚しなければならない。だが Theresa は決してそうは思い至らない

し、その結果にも甘んじていないので、Theresa がこの時 Duke との婚約を破棄して伯爵と結婚するのは、彼女が自らの意思で主体的に行動したというように積極的に評価できるものではなかったことが判明するのである。むしろ Theresa が伯爵夫人の肩書きにもひかれた俗物的な思わくから出た行為でさえあることが示唆されている。Victorine は常に Theresa を伯爵夫人と呼び、後に Theresa が未亡人になって Crowley 城へ戻ったあとも、召し使いたちにもそう呼ぶことを強制する。

彼女は、昔から居る召し使いの誰にせよ、もし Theresa 嬢というかつて使い慣れた名称をふと使ってしまうと、常に憤慨した。「伯爵夫人です」と彼女は猛々しく叱責して言ったものだった。(273)

それはともかく、Theresa のこの伯爵との結婚は父の Mark 卿を激怒させる。また誰の目にもはじめから破綻は見えていたのだが、実際、夫の見せかけの愛情はすぐに消え、Theresa は自分の軽率さをひどく後悔するようになる。

しかし惨めな思いでいる Theresa にとって、追い打ちをかける出来事は、一年程後に、Duke が Bessy と結婚したという報せが届いたことだった。それを知った時 Theresa は「私はそうなろうとは決して思わなかった——そんなことは考えたこともなかった」(270) と叫ぶ。この Theresa の真意は次いで Victorine が口にする言葉——

「それはふさわしいことではない。それは恥ずべきことだ！ あなたをかつて愛していたのに、そしてあくまで機会を待つのでなく、あんな牧師館の見すばらしい貧しい娘と我慢してやっていくなんて。……Mark 卿は感じておられるはずだ、Duke Brownlow 氏は待って、待って、待っているべきだった、と。誰かは14年間も待ったのではなかったかしら？ 伯爵も、いつまでも生きるということはないのに。」(270)



に、よく示されている。

つまり Duke の Bessy との結婚は、Bessy が Crowley 城の女主人になったことを意味し、それは本来 Theresa のものになるはずの位置を Bessy が奪ったことになるのだった。伯爵が亡くなる日まで Theresa を待つことをしなかった Duke も、Theresa を裏切ったことになるわけだった。しかし客観的には先に見たように Theresa が無分別に伯爵と結婚したことに発端があり、いわば Theresa には自業自得の結果である。そうは考えずに上記のように反応するところに Theresa の身勝手さがよく示されている。

「Theresa は毎日、悪い巡り合せの結婚を、ますます激しく後悔した」(270)。この頃、Theresa の持参金を使い尽した伯爵は、或る日 Theresa に暴力をふるうまでになった。それを知った Victorine は Theresa のために遂に伯爵を毒殺する決心をする。しかし偶然その日伯爵は、何かの揉め事で、外で殺されてしまう。つまり Victorine による伯爵の毒殺自体は未遂に終わったことになる。しかし後に Victorine が Theresa に訴えて、

「あなたの夫を永遠に静かにさせる毒薬の一服がすっかり準備できていた。……彼に死んで欲しいという望みをあなたは持っていたし、私はあなたから彼を取り除いてやろうという意図をもっていたから」(281)

と言っているように、伯爵はもしこの日喧嘩で殺されていなければ、確実に Victorine に毒殺されたはずである。Victorine は伯爵が外で殺されたことを知り、彼のためにその直前調合しておいた毒薬を、そっと床に捨てたのだから。

こうして Theresa は遅れ馳せに未亡人となり、一文無しの状態で父の Mark 卿の下に戻って来、父と完全に和解して城に住み始める。城には既に Duke と Bessy の夫婦と彼らの子供 Mary が暮しているので、これは非常に不自然な状況である。何故なら城にあたかも女主人が二人居るようなものだからである。「Duke は城での妻 Bessy の立場が厳格に守られるよう常に用

心していた」(274) し、人の良い Bessy は Theresa を歓迎してやったが、Bessy の母 Hawtrey 夫人は不快に思い、非常に警戒する。Hawtrey 夫人自身がその一年程前に未亡人となって、牧師館を出なければならなくなった時、「Bessy は喜んで母を城に呼びたかっただろうし……Hawtrey 夫人もその望みを娘に提案したのだったが、Mark 卿が頑固にそれに反対した」(270) ため Hawtrey 夫人の行き場がなくなった。しかし「幸運にも新たに赴任した牧師が独身者だった」ので、彼の世話をする家政婦として牧師館に留まれたという事情があった。それだけに一層、今では娘の Bessy の家庭になっている Crowley 城へ Theresa が傍若無人に入り込んで来たやり方が、Bessy の人格の蹂躪として、Hawtrey 夫人には腹立たしく思えたのだ。

しかし Mark 卿父娘にとっては Theresaこそ Crowley 城の女主人なのである。Mark 卿は「城の奥方の立場から Bessy を立ち退かせ、Theresa に家の采配を振るわせ、テーブルの女主人の座るべき場所に座らせられるものなら、喜んでそうしたかっただろう」(274)。それでも Mark 卿の場合はそれが理不尽な望みであることを知っているから、ただそう願うだけであった。Mark 卿には娘と和解できたことで満足するだけの人間的な節度があったことがわかる。

従って Mark 卿の生存中は、まだ Crowley 城内の矛盾も大きくはない。が、その年の秋に Mark 卿が亡くなったあとも、この不自然な状況は続いた。表向きは、同情した Duke と Bessy が熱心に Theresa に同居を勧めたからであるが、Theresa にしてみれば、もともと自分がこの城の女主人であるべきなのだった。彼女はまだフランスで伯爵との生活に耐えている時も、次のように考えている。

彼女は父の下へ悔い改めた貧しい放蕩息子のように帰ったかもしれなかった。もし Duke と Bessy が、彼女の父の心と彼女の父の家の両方に、本来の彼女の場所に、勝ち誇って（とそう彼女には思えたのだが）君臨していなかったなら。（強調は引用者、271）

多くの 'Crowley Castle' 論は、Theresa が Duke を深く愛し、そのために Duke の愛を奪った Bessy を邪魔に感じるととらえるけれど、<sup>14</sup> 作者が描いている順序は逆である。先ず自分達の事実上の婚約を些細なことや世俗的な見栄から破棄したのは Theresa の方であった点は先に見たが、それは Theresa が Duke をそれ程深くは愛していなかったことをも示している。その後も暫くは、Theresa は自分への伯爵の愛情を信じている。伯爵との生活が破綻なく送れるなら Theresa はそれをこそ続けたく思い、心配する Duke のことは歯牙にもかけていない。Duke が Bessy と結婚したことを知った時の怒りも、自分の所有物だと思い込んでいたもの (Duke の愛情、父の居城等) が、そうではないと知らされたことへの怒りである。そして Bessy に対して怒りは感じていても嫉妬は感じていない。つまり作者は Theresa を身勝手な女性として描いていて、決して犠牲者とは描いていないということである。(この点で Theresa は、'Morton Hall' の John 卿の身勝手さとよく似ている。二人共自分のものになったかもしれないものを自分のせいで失った時、残酷な手段で取り返そうとするからである。)

ちょうどその頃 Theresa は、政界に出て London で過ごすことも多くなった Duke の、社会的な活躍を理解し支援してやれるのは Bessy でなくて自分しかいない、という口実を見つけ出す。Bessy はもともと「Duke の妻にふさわしいように育てられてきていない」(268) し、「家庭の主婦の仕事以外のどんなことにも決して賢くはない」(276)。<sup>15</sup>

こうして、議会の活動から戻って来る Duke を、病気の子供の世話（今では Bessy には二人の子供がいる）に明け暮れる Bessy に代って迎えてやるのは Theresa の仕事になる。この時嬉々として行動する Theresa を見て、Victorine は「Theresa の心の奥深い秘密」つまり名実共に自分が Crowley 城の女主人になりたいという Theresa の願望を「読み取ったと思った」(278)。そして「Bessy の代わりに君臨する」(282) ことができるように、Victorine は、その時二番目の子供の病死を嘆く余り人事不省に陥って床に就いていた Bessy をこっそり毒殺してしまうのである。

このように Victorine の第一の殺人未遂も第二の犯行も、動機は Theresa の望みをかなえてやり、最終的に Theresa が城の女主人として納まることができるようにお膳立てをしてやることである。従って Bessy の死んだあと、「昔の約束が改めて履行され」(280)、Theresa は Duke と結婚し、遂に Crowley 城の女主人という元の位置に戻ったのである。つまりこれらの犯罪の根底には、一貫して Theresa の身勝手な願望が潜んでいることが強調されている。決して Theresa にとって Duke の愛情のライバル Bessy を取り除くことが目的だったのではない。

ところで作者が Victorine の第一の犯行を未遂にしているのは何故だろうか。それは第二の犯行と犠牲者のタイプが異なるからである。この小説では伯爵の方こそ Victorine に毒殺されても仕方のない悪人として描かれている。もしそういう伯爵が Victorine の手で実際に殺されたとしたら、その殺人行為はむしろ読者に承認されるものになってしまったであろう。そしてもし Victorine のその行為が許されるなら、Victorine の意識にとって「運命によって一度阻止された未遂の行為の再試」(282) にすぎない第二の犯行も、行為としては許されることになるだろう。作者はそういう解釈の起こる余地を慎重に避けているのである。また伯爵の場合は未遂とすることで、伯爵が Victorine の魔手を逃れることのできた悪運の強さを強調することもできる。そして実際には毒殺する予定のその日に他の場で殺されたのだから、Theresa の前から障害物を取り除けるという本来の目的も達せられたことになるのである。

### III. 「有罪それとも無罪」

#### 1) Theresa の願望の有罪性

では次に、この殺人事件に於て、Duke と結婚したあと初めて犯行を打ち明けられた Theresa は果たして Easson や多くの批評家の判定しているように「ほとんど有罪とは言えない」(Easson 220) と言えるのかという問題を考えてみたい。

作中ではこの問題は次のように描かれている。Victorine から「私たち共有の秘密」(281) を打ち明けられた Theresa は恐怖に震え、その日から性格も一変し、「重い心」(283) で暮し始める。一方、自分の実行してやった恐ろしい犯罪のお陰で「Theresa は利益を得た」(285) のに、自分に対する Theresa の感謝の念が充分でないと考える Victorine は、「犯罪がなされたあとで、犯人がもはや用済みだからといって」(282) 狂人扱いされて自分は捨てられるのではないかと思い込み、ますます自分を追いつめていくのである。

ところで、この犯行を打ち明けられた時の Theresa の反応はどう考えるべきだろうか。この部分は具体的には次のように描かれている。先ず Victorine が犯行を仄めかした時、Theresa は何か恐ろしい事がなされたことを悟る。そして

「話して、Victorine。そして私に何のことを言っているのか言いなさい。私たちの共有の秘密とは一体何ですか」とかすれた声で言った。……「おや、あなたは知らないと言うかのようですね！」と Victorine は厳しく答えた。……Theresa の表情は厳しかった。しかし疾しいところはなく無垢なものだった。  
(281)

しかし Victorine が第一の未遂事件の経過を具体的に明かしていくにつれ、「Theresa は死人のように蒼白になった」(281)。更に Victorine が第二の犯行を口に始めると、

「Victorine！ 私はお前の言う意味がわからない！」と Theresa は叫んだ。しかし何かの恐怖が彼女の全身を襲ったに違いない。彼女はとても激しく身震いした。「わからないですって？」[と Victorine は言い返し、Bessy の毒殺の経緯を述べて]「まるで気が狂った人間が狂気のせいで口走っているかのよう

に、このかわいそうな Victorine のことを扱ってはいけませんよ。犯罪がなされ、犯人がもはや用済みになった時、そういう企みがなされるのを聞いたことがありますけれど。」[と Victorine は警告した。] (282)

Theresa は何が起ったかを、この時点まで正確には知らなかった、或いは知りたくなかったかもしれないが、Victorine の告白内容は Theresa にとって決して思いがけないことではなかったのである。むしろ思い当る節が大いにある出来事だったと言えるだろう。Victorine は一貫して、Theresa が暗黙の了解を与えていたと考えているが（だからこそ「私たち共有の秘密」と表現している）、そう考える Victorine を Theresa は決して狂人扱いすることなど出来はしなかったのである。

そんな頃、妻の突然の変調を心配した Duke の配慮で Theresa が Victorine と離れて転地療養させられている間に、Victorine は死の床に就き、真実を告白して死んでしまうことになる。すべてを知った Duke は転地先の Theresa に手紙を書き、「君のことは君の良心にまかせる」(287) が、「今後は君とは他人である」という絶縁の宣告をし、Theresa に弁明の機会を与えることなく、Mary と Hawtrey 夫人とを連れてイギリスを去ってしまう。Theresa は跡を追うが間に合わず、遂にそこで心が破れて死んでしまうのである。

こうした経緯を見れば、Duke は Theresa を Victorine と同罪と判断したことが分かる。そして作者も、Theresa が Duke に弁解の機会を与えられることなく悲嘆の余り死んでしまうと描いていることから、Duke の判断と同じように考えていることが分かる。

Bonaparte は「Theresa は小説の終りまでには夫に有罪と宣告されて捨てられている。自らを罰するために彼女は Crowley 城に全く一人で閉じこもり、世間から『隠遁する』ことを選ぶ。……彼女は今や監禁された妻になりつつある」(165) と要約しているが、この要約は恣意的である。作者が「隠遁する」(282) という語で表現しているのは、Theresa が、Victorine から秘密を打ち明けられた直後、夫に同行して来ていた London の屋敷からすぐに城へ戻るという意味である。勿論この時点では夫の Duke はまだ何も知らず、Theresa が突然この「隠遁」を言い出した理由が全くわからず、ひどく心配するのである。従って作者は Theresa に「隠遁する」ことなど決して許

していないのである。「夫に捨てられた」あとの彼女の行動も重要である。Theresa は Duke に弁明しようと「気が狂ったように急いで」(287) Dover へと馬を走らせたのだが、

Dover に着いた時、海のかなたに Duke と彼の子供を運び去る白い帆船を見た。Theresa は遅すぎた。そしてそれが彼女の心を破った。彼女は Dover の教会に埋められている。(287)

作者は Theresa に大変厳しい宣告を下していることがわかる。

Theresa のこの最後の死についての、Easson の解釈も納得しがたい。Easson は、「Theresa は願望に於てさえほとんど有罪とは言えない」(220) と分析したあと、「それにもかかわらず Theresa は死ぬ。子供っぽい意地悪の罰を受けて」と言っている。ここで Easson が「子供っぽい意地悪」と分析しているのは、Theresa も Bessy も少女の頃の、Theresa の仕打ちを指している。例えば先に見たように、彼女たちの家庭教師のレッスンで宿題を忘れた責任を Theresa が一方的に Bessy に押しつけ、彼女をひどく詰ったりした行為を指す。しかしこれすら少女の頃の「子供っぽい意地悪」でなく、Theresa の傲慢な特権意識の表明であったことは既に見た通りである。しかも Gaskell が最後に Theresa の死を持ってきているのは、単に Theresa の子供の頃のそういう姿勢のせいではない。Bessy が毒殺されたことに対する責任としてのものである。

Theresa は Duke が Bessy と結婚したと知った時、「そうだろうとは決して思わなかった」と言った。ではどうなると思っていたのかは、先に見た Victorine のせりふによって示されていた。つまりいずれは自分が Duke と結婚するはずだ、というものであった。従ってそれが実現したあとの Theresa は大きく変貌を遂げる。例えば Bessy の母親 Hawtrey 夫人を城に来させ親切を尽くしたり、Bessy の娘 Mary にやさしくしたりする。Victorine から秘密を聞いたあとは一層強くそうする。Duke は「彼のいとしい人の徳や魅力

をこのように新たに認識して」(284) 感動する位である。しかしこれらは自らの願望を達成した Theresa が他人に見せる余裕であり、良心の呵責であって、決して Theresa の本来の性格ととることはできない。作者は Theresa の本質的な性格は少女の頃から一貫して同じものとして描いている。従って、直接手は染めなかったけれど「その利益だけは刈り取って来た」(282) 犯罪に対して、作者は Theresa を免責していないのである。作者は Theresa をはっきり有罪とし、Victorine はあくまで代理の殺人者としているのである。

## 2) 代理殺人

このことは、もし封建的な時代の犯罪なら Victorine は単に刺客の役割を果たしたにすぎないということを示している。が、これは近代社会の犯罪として描かれているために、たとえ代理ではあっても、直接手を下した Victorine にも当然の責任が生じているのである。そして作者は単なる刺客ではない Victorine の性格描写を丁寧に行ってきている。

Victorine は激しい性格のフランス人の女性で、「Theresa のごく幼い頃から世話をしてきたため、力の点でも愛情の点でもほとんど親のような地位を占めていた」(256)。Crowley 城内でもすべての召し使いに対して権力を持っていただけでなく、Mark 卿に対してさえ「絶大な影響力を及ぼし」(256)、牧師館の Hawtrey 夫人は「Victorine さんに反対したり敵になったりしないように常に気を付けている」(257) 位だった。この Victorine でさえ、Theresa が未亡人になってフランスから Crowley 城に戻って来る際同行して帰って来た時には、当然、Crowley 城での権威は失墜していた。

家政婦部屋には新しい権力が発生していた。……新しい家政婦が、以前は Victorine の意見のこだまにすぎなかった者の場所に君臨していた。一般に召し使いの間には、Victorine が権威を我がものとするにはすべて抵抗しようとする傾向があった。彼女は一二度闘ったあとで、自分が無力であると感じた。が、復讐を心に誓った。(275)



だからこそ Victorine は一層 Crowley 城での自分の地位を回復させるためにも、Theresa に城の女主人になってもらう必要があった。

しかし作者の関心が Victorine のこの願望にあるのではないことは明らかである。死の床で Victorine は自分の行為を後悔したり、懺悔して死ぬのではない。彼女は自分の殺した Bessy の幻に脅え、次のように叫ぶ。

「伯爵夫人を私の所へ連れ帰って来て。彼女こそそこに立っている死んだ女と対決すべきよ、私はそうするつもりはないわ。皆んなその女に眠って欲しがっていた——そして伯爵夫人もそう願っていた、自分が法的な女主人の場に割り込めるように。Theresa, Theresa, どこに居るの？ あなたが私をそそのかしたのよ。私がしたことはあなたのためにしたこと。それなのにあなたは行ってしまったのね、私を一人この死んだ女と残して！……戻って来て、私をこの死んだ女から救っておくれ！」（強調は原文，285）

ここには犯した罪の恐ろしさに脅えつつも、それを自分の責任として引き受けるのではなく、ひたすら Theresa の、「そんなにも忠実に仕えて来た者への忘恩」（280）を詰る姿が示されている。つまりここでも作者は Victorine をそこまで追い詰めた Theresa の責任をこそ問題にしているのである。

最後に、この 'Crowley Castle' に於て、作者が代理殺人という手段を使った理由を考えてみたい。その一つは、1860年に出版された、Nathaniel Hawthorne の *The Marble Faun*（『大理石の牧神』）の影響であると思われる。Gaskell はこのロマンスが最初イギリスで *Transformation*（『変貌』）という表題で出版された時から大変関心を持ち、友人たちに宛てた幾通もの手紙<sup>16</sup>でこの作品に触れている。この作品は Charles Eliot Norton が Gaskell 宛手紙<sup>17</sup>で述べているように、当時多くの人々にはローマの観光案内として読まれたかもしれないのだが、Gaskell の関心は全くその点にはなくて、自分も見たとあるという、作中のクレオパトラの像について言及しているのである。

しかし Gaskell がこの作品で真に関心を持った点は作中の、特に二つの間

題だったと思う。一つは代理殺人の問題、もう一つは殺人の目撃者の問題である。そしてこの二点がこの時期の Gaskell の二つの作品にそれぞれ使われたのだと思う。前者は 'Crowley Castle' に、後者は同じく1863年に書かれた 'A Dark Night's Work' に於てである。<sup>18</sup>前者の問題は代理殺人だから Theresa の代理としての実行犯の役割は脇役の Victorine に割り振られている。後者は目撃した人間自身の問題であるので、ヒロインの Ellinor に託して主要テーマとして描かれていると言える。

*Transformation* では、これはロマンスとされているものの、代理殺人を犯した Donatello は罪の意識に悩む近代的な人間として扱われている。しかし Gaskell は、そもそも代理殺人を犯すような人物がそういう近代人の悩みを持つということ自体を疑問視し、従ってそういうことをする人物を忠実な乳母として設定し、結果として、代理殺人というような手段は本来近代社会では起こり得ないものであるということを示そうとしたと言えるだろう。<sup>19</sup>

このように、近代小説であるのに封建的な主従関係を前提とした、代理殺人者という、脇役としての Victorine の位置付けを見ても、Gaskell が 'Crowley Castle' に於て主に描きたかったテーマは、Crowley 家の女相続人 Theresa のエゴイスティックな行動故に自滅していく問題であったことがわかるのである。

※ これは拙論「ギャスケルの『クロウリー城』——ティリーザの願望の達成と挫折——」(杉本龍太郎教授古稀記念論文集刊行委員会編『英語・英米文学のエートスとパトス』(2000年 大阪教育図書(株) 所収)に加筆したものである。

[註]

1. Charles Dickens, ed. *Mrs. Lirriper's Lodgings, All The Year Round*, vol. X (本の友社, 1991).

この特別号については「Charles Dickens の『前置き』のために、今尚覚えら

れている」と A. W. Ward は述べている ("Introduction" to *Cousin Phillis* (New York: AMS Press, 1972) xli)。

2. Charles Dickens の「前置き」は 'How Mrs. Lirriper carried on the Business' (「リアリパァ夫人がこの仕事を始めた顛末」) と題されていて、第 1 章に当たる。従ってこれを除くと、Gaskell の 'How the First Floor' が「その物語集の最初のもの」(Ward, xli) に当たる。
3. The World's Classics 版では「最初の約 4 分の 3 の部分」と表現されている。尚、この版所収の 'Crowley Castle' は、最初の導入部分を除いて、雑誌掲載時のままになっている (Suzanne Lewis, "Introduction" to *The Moorland Cottage and Other Stories* (Oxford: Oxford U. P., 1995) xxiv)。  
またこのマニュスクリプトについては J. G. Sharps が次のように説明している。「明らかに、完全な原稿が装丁されていたのに、その後結論部分の数ページが切り取られたのである。切り取り跡や表装という現存の証拠から判断すると、約 20 枚分がそんな風にして取り除かれたのだろう」(John Geoffrey Sharps, *Mrs. Gaskell's Observation and Invention* (Fontwell: Linden Press, 1970) 449)。
4. Cf. Ward xli-xlii.
5. Gerald DeWitt Sanders, *Elizabeth Gaskell* (New York: Russell & Russell, 1971) 113. 尚、初版は 1929 年。引用文中の作品表記の方法は原文に従った。
6. Edgar Wright, *Mrs. Gaskell: The Basis for Reassessment* (London: Oxford U. P., 1965) 190.
7. Felicia Bonaparte, *The Gypsy-Bachelor of Manchester: The Life of Mrs. Gaskell's Demon* (Charlottesville & London: UP of Virginia, 1992) 163-165.
8. Coral Lansbury, *Elizabeth Gaskell* (Boston: Twayne, 1984) 61. また Sanders は「気味悪い物語の一つ」(113) と言っている。
9. Elizabeth Gaskell, 'Crowley Castle', *The Moorland Cottage and Other Stories*, The World's Classics Ser., 255. 以下引用文のページ数はこの版に拠る。
10. Thomas Hardy, *Tess of the D'Urbervilles*, ch.52. 尚、訳するに当っては井上宗次・石田英二訳『テス』(岩波書店, 1994) を利用させて戴いた。
11. A. Stanton Whitfield, *Mrs. Gaskell: Her Life and Work* (London: George Routledge & Sons, 1929) 75.
12. Lewis, "Introduction", The World's Classics Ser., xxi.

13. Angus Easson, *Elizabeth Gaskell* (London: Routledge & Kegan Paul, 1979) 220.
14. 例えば Bonaparte は「たいていのそういう二人の女性同様, Theresa と Bessy は同じ一人の男性を愛する」(163) と分析する。また Lansbury も, Theresa が「一度拒否した求婚者だった Duke と, 自由に結婚できるように……」(61) と表現している。
15. 作者はいわゆる家事については, 実際の重要さと多忙さにもかかわらず, それがしばしば, 外で働くことに比べて軽視されすぎであると考えており, 既にその問題を中心テーマにした作品 'Bessy's Troubles at Home' ('家庭でのベシィの悩み') (1852) も書いている。'Crowley Castle' でも家事に専念する女性を Bessy と名付けているのは, 偶然の一致かもしれないが, 興味深い。また Bessy という名前の女性が (*Wives and Daughters* の Molly と同じく) 上流社会に属していないということも示しているだろう。

また Duke は Bessy が必死で看病していた子供が死んだ時, 「赤ん坊の命に比べて社会的名声がいかに空しいものであるかを感じた」(278) り, 最後の場面で, 国会議員として華々しく活躍していた生活をさっさと捨ててしまうというように描かれている。こうした描写の中にも, Gaskell は公の生活のために家庭生活を犠牲にすべきでないと考えていたことが読みとれるだろう。

16. Cf. *The Letters of Mrs. Gaskell*, ed. J. A. V. Chapple and Arthur Pollard (Manchester: Manchester U. P., 1966) L 441, 450, 498.
17. *Letters of Mrs. Gaskell and Charles Eliot Norton 1855-1865*, ed. Jane Whitehill (London: Oxford U. P., 1932) L 20.
18. 尚, 'A Dark Night's Work' は1862年9月の手紙 (*The Letters*, L 697) で「4年間あたためてきたもの」と表記されている作品であると一般に見做されてきている。もしそれが正しいとすると, この作品は遅くとも1858年頃には Gaskell が構想を暖め始めたことになり, 1860年出版の *Transformation* とは関係がないことになる。しかし筆者は必ずしもそうは考えない。これらの点については 'A Dark Night's Work' 論で改めて考えてみたい。
19. 樋口一葉の「暗夜」(1894 (明治27) 年初出) の中でも, 近代社会に移行しつつある時期に起こる「代理殺人」未遂事件が描かれている。その点で 'Crowley Castle' や *Transformation* と共通するものがある。これらの問題についても稿を改めて考えてみたい。

## **The Latent Theme of Elizabeth Gaskell's 'Crowley Castle': The Cruelty of the Falling Landed Gentry**

**Shoko NAKAMURA**

'Crowley Castle' by Elizabeth Gaskell has been classified among short stories of terror. A critic, for instance, defines it as one of the author's "weird" stories. It is true that Victorine, a faithful nurse of the heroine Theresa, once commits an attempted murder and then succeeds in another, which takes place in an old Norman castle, Crowley Castle; as a result the Crowley family cease to exist, though they are of an old knightly family, the ancestor of which goes back to the time of Norman Conquest. From these situations of this work, many critics conclude that Gaskell took the trend of Sensationalism which was in vogue in the 1860s.

Gaskell, however, never uses the seeming sensational and mysterious elements to inspire terror in the readers, but she tries to point out through the gruesome story how the falling landed gentry could become cruel. They contrive a way, however inhuman, of restoring their properties and power once lost owing to their follies. Therefore Bessy, a playmate in the heroine's childhood, is to be killed with poison, because she is considered as a violator of their rights. What Gaskell describes is how dreadful their intention is, when it lies latent at the bottom of the landed gentry's hearts.

The story develops like this. Sir Mark Crowley, the last baronet taking the name of Crowley, has just one daughter Theresa Crowley. Because of the entail, all that belongs to Sir Mark is to go to his nephew Duke, after his death. But Sir Mark is not afraid of it, since he plans to marry Theresa to Duke. Theresa, however, breaks her practical engagement with Duke, taking offense at trifles, and gets married to a poor French count who is to use up all her dowry and even use violence on her. The year

after Duke gets married to Bessy who is an only daughter of a poor neighbouring parson, and then the couple begin to live in Crowley Castle. As time goes on, they have two children, and enjoy happy family life.

Then penniless Theresa returns home to her father, after her husband was wounded to death owing to a dishonorable duel at the very day when Victorine herself was to kill him with poison. It is intolerable to Theresa that Bessy takes the headship of the castle which is, as she imagines, her own place. As the nurse Victorine thinks that she reads a secret wish of her mistress, she kills Bessy with poison when the latter wails for her lost baby child. It is surprising that Theresa does not realize what has happened. But as it is she and Duke who never suspects the murder get married after one year.

Thus Theresa reigns at last in the place she has considered as her own property. After marriage, Theresa learns from Victorine, who thinks that her mistress does not enough appreciate her criminal act, how she could get the place in the castle. Theresa trembles with fear for the first time, but it is too late. When Victorine is apart from her mistress, she confesses to Duke at the death bed and dies rebuking her mistress for being ungrateful. Duke sends a letter of divorce to Theresa and immediately leaves England with Mary, an only child left between him and Bessy, and Widow Hawtrey, Bessy's mother. Theresa dies of heartbreak, when she realizes that there is no means to prove her innocence.

Judging from the story it is clear that Gaskell declares Theresa guilty of the Bessy's murder, though Theresa does not actually perpetrate the murder and has never even expressed the hope of it. The author delivers judgment more severely on Theresa rather than on Victorine. The latter is portrayed just as a wretched person rather deserving the reader's sympathy and dying of horror of Bessy's apparition. But as for Theresa, the author describes how she is found herself not guilty and tries to maintain her innocence in vain.